

## 第六章 栗野の産業とくらし

栗野の人びとは、地域の八割を占める山地に代表される豊かな自然の恵みきょうじゆを享受し、利用しながら太古の昔から生活してきました。

近代に入ると、山や天の神への祈りを絶やさな一方、道や農地を切り開くなど自然への働き掛けを強め、また「中枝式大麻播種器なかつえしきたいまはしゆき」に代表される農具の改良など産業の発展に努めました。

そして明治の中ごろ、良材があることを耳にした一人の彫刻師が上粕尾の発光路を訪れます。彼はその材を用いて日本近代美術を代表する作品を制作することになりました。



▲永野中学校校章（永野中学校閉校記念碑）  
麻の葉がデザインに取り入れられている。

## 太古のくらし

粟野地域は域内の八六%を山地が占めています。この山地は足尾山地と呼ばれ、日光市から足利市にまたがっています。

粟野地域の地形は、足尾山地の中心の一つ、横根山や地藏岳から分岐した南東方向に派生する四筋の尾根と、その間を南東方向に流れる粟野川・思川・永野川によってできた三本の平行谷（谷底平野）から成り、谷底平野の山側には河川が形成した堆積段丘の緩傾斜面が所々で広がっています。

こうした豊かな自然の恩恵を受け、古くから人々が粟野の地で生活を営んできました。中でも、各河川沿いに形成された堆積段丘は沢や湧き水に恵まれ、日当たりがよく、河川より二〜四m高く、洪水などの害が少ない安定した場所であり、先人たちにとって「住みたい場所」だったのでしょう。段丘上には太古の人々の暮らしの痕跡を示す遺跡が数多く存在しています。

### ●共生の時代〜旧石器時代・縄文時代

粟野における人類の最初の足跡は今から約二万年前の旧石器時代にさかのぼります。この時期は氷河期にあたり、火山灰が降り積もる冷涼な気候の中でアカマツなどの針葉樹とミズナラなどの広葉樹の疎林と草原が広がっていました。人々は現在絶滅してしまったナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物

など食料となる獲物を追い求めて移動生活をしていました。上永野の戸木内遺跡では削器と呼ばれる動物の皮や骨、木を切断する石器が出土しており、狩りをしながら移動生活の途中で、この地を通過していった人がいたことが分かります。

縄文時代になると急速な温暖化により、人や動物の食料を育むクリ・ドングリを主体とした落葉広葉樹の森が各地に広まりました。人々は土器をはじめ新たな道具を作り、自然環境に順応した狩猟・採集・漁労を中心とする高度な資源利用を確立しながら、住居を構えて定住生活を始めました。自然の恵みを享受し、生活が安定する一方で、自然に対する畏怖から再生観念という独自の精神文化が形成され、マツリがさかんに行われました。入粟野の五月遺跡、上粕尾の横根山遺跡や上ノ山遺跡など山間部にも早期から前期にかけての生活の痕跡が認められ、北半田の牧場遺跡では前期の竪穴住居跡が確認されています。下永野の久分遺跡では、東京大学文化人類学研究室によって当地域で初めて発掘調査が実施され、中期から後期にわたってムラが形成されたことを示す竪穴住居跡や配石遺構などが見つかっています。また、久野の中坪遺跡からはマツリに使われた石棒と呼ばれる祈りの道具が出土しています。

### ●変革の時代〜弥生時代・古墳時代

大陸から稲作や金属器がもたらされた弥生時代は縄文時代の

自然環境に順応した生活様式を大きく変えました。また粟野では稲作やムラの実態は明らかになっていませんが、「再葬墓」と呼ばれる特徴的な墓が見つかっています。これは遺体を埋めた後、骨になるのを待って掘り出し、その一部を壺に納め、再び穴に埋葬する葬制です。戸木内遺跡では、一つの穴に一三個の壺を納めたものを含め、一八基が見つかり、市指定史跡になっています。同様の遺構は北半田の牧場遺跡でも一基が確認されています。

古墳時代はムラやクニを統率する有力者が権力の象徴として巨大な墓（古墳）を築造する時代です。粟野では、久分遺跡でムラの存在を示す竪穴住居跡が確認されていますが、前方後円墳はもとより小さな円墳ですら見つかりません。山間部はまだ本格的な開発に着手することが困難で、有力者を育てる地盤には成りえなかったのかもしれない。しかし、北半田の医王寺裏山からは円筒埴輪片が出土しており、域内南端の思川流域には古墳を築造し得る有力者がいた可能性があります。

《参考文献》

鹿沼市教育委員会 『鹿沼市遺跡分布地図』二〇一一年



▶久分遺跡 竪穴住居跡  
(縄文時代中期)



◀戸木内遺跡 再葬墓  
(弥生時代中期)

## 野州麻の生産と「中枝式大麻播種器」

麻は植物から作られる強くて長い繊維のことで、国内においては、衣類や縄、袋などの材料として古くから利用されてきました。栃木県で生産される麻は「野州麻」と呼ばれ、滑らかに強靱なその品質の良さから広く取引されました。

野州麻が栽培されるのは、鹿沼市をはじめ栃木市や佐野市等の足尾山地の山すそに広がる平野の地域で、主産地として粟野の永野地区が挙げられます。西日が当たらず、夏でも涼しい氣候で、水はけがよく砂礫を含んだ痩せた土壌（ジャリツパタ）が適するとされています。

### ●「野州麻」生産の歴史

野州麻の栽培は鹿沼で始まったといわれ、弘治年間（一五五五～一五五八）に、信濃国（長野県）から東大芦の引田に伝わったという説と、伊勢神宮参拝の道中に得られた麻種が粟野の岡にもたらされたという説があります。江戸時代中期には、「鹿沼麻」とも呼ばれた野州麻は鹿沼宿の麻問屋に集められ、江戸や、千葉・茨城の海岸地域に出荷されました。江戸では下駄の鼻緒の芯縄として、千葉や茨城では漁網として用いられました。明治時代には、工場における縄や綱の生産が始まり、野州麻の利用も拡大しますが、やがて外国産の安価なマニラ麻や紡績に

適した亜麻・苧麻等への切り替えが進んで行きました。戦後は化学繊維の普及による需要の減少や「大麻取締法」による規制強化のため野州麻の生産農家は激減していきましたが、横綱や風系等、伝統文化を担う繊維として必要とされているほか、紙や建築材料等の新しい麻製品の開発も進められています。

### ●中枝式大麻播種器の発明

なぜ「野州麻」の生産は、これほど発展を遂げたのでしょうか。栃木県立博物館の篠崎茂雄氏は「何よりも先人の努力が大きい」と、高品質の麻を大量生産することを可能にした用具や技術に注目します。例えば刈り取った麻を熱湯に浸す「ユカケ」は長期保存や品質向上のために重要な作業とされ、栃木県など限られた地域でのみ見られる工程です。また、刈り取り用の「アサキリポウチョウ」や、麻皮の発酵に用いる「アサプロ」、麻の繊維をこすり出す「ヒキゴ」は、野州麻の生産地（アサプロは群馬県でも見られる）に特有の用具です。これらを含めた三六一点の資料は「野州麻の生産用具」として平成二〇年（二〇〇八）に国の重要有形民俗文化財にも指定されました。

明治時代には、国の殖産興業政策の下、野州麻の生産においても県や研究熱心な農家による生産技術や品質の向上が目指されます。そうした中、口栗野村の中枝武雄（一八五三～一九二三）によって発明されたのが「大麻播種器」です。それまで麻

の種まきは手まきで行われていましたが、均等にまくのは難しく熟練を要しました。しかし播種器の登場により、一台で一五人から二〇人の作業に匹敵する程、作業効率が上がりました。播種器は麻の種を入れる長方形の箱と、その両側に付いた車輪、中央の長い柄から成り立ちます。箱には種が落ちるための口と畑の土に溝を引くための爪が付いており、柄を持って後ずさりながら引くことで回転する車軸に付けられたローラーから種が落ちる仕組みになっています。中枝式播種器が発明されたのは明治一五年（一八八二）のことでしたが、明治四二年（一九〇九）まで絶えず改良が重ねられました。武雄はこの発明により内国勸業博覧会における褒賞の他多くの賞を授与されました。



▲中枝武雄肖像（松尾元保『ふるさと人物伝栗野の人びと』より転載）

武雄の父、大貫武助（武躬）は口栗野村を治めた中條家領地の名主を務めた人物であり、大政奉還の際に領主より「中枝」姓を授かりました。慶応三年（一八六七）、一四歳のとき父に代わって名主になった武雄は、その後、様々な作物の試作研究や用水路の整備等、農業の発展に情熱を注ぎ、また村会議員として地域発展のため力を尽くしました。

《参考文献》

『ふるさと人物伝 栗野の人びと』栗野町役場、二〇〇一年  
 柏村祐司・篠崎茂雄『野州の麻と民俗』随想舎、二〇二四年



▲中枝式大麻播種器（栗野歴史民俗資料館所蔵）

## 河川を利用した運搬―筏流し―

自動車や鉄道がなかった時代、物資を遠くまで運ぶのに、どのような方法がとられていたのでしょうか。

陸路においては、荷物を背中に乗せて運ぶ牛や馬が活躍しました。道沿いに残る馬頭観音は、人びとのくらしにとって大切な存在だった家畜の供養のため建てられたものです。

### ●河川による物資の運搬

河川もまた、街道と共に重要な輸送路として利用されました。船を使えば、川の流れという自然の力を利用し、駄馬だばによる輸送よりはるかに効率的に物資を運ぶことができました。江戸時代以降は幕府や大名によって街道と共に河川交通の整備も進められ、多くの河岸かし（荷物を上げ下ろしする船着場）が開かれました。

粟野を流れる粕尾川や粟野川は、鹿沼方面からの大芦川や南摩川と合流し思川（小倉川）となり、さらに渡良瀬川に合流した後、利根川に入り江戸川を通じて江戸に至ります。粟野地域も、河川を利用した流通によって江戸とつながっていたのです。

### ●筏流し

山で切り出された材木を川に流し下流に運ぶことを「川下げ」

といえます。川下げには「筏流し」と呼ばれる手段がとられました。これは切り出した木材を筏に組み上げ運搬する方法です。川の上流では材木を一本ずつ流す「管流し」という方法で輸送され、川幅が広くなって水量が増した下流で筏に組み直されました。筏流しは古くから全国各地で行われていましたが、栃木県では、特に鬼怒川の筏流しが有名です。粟野地域の山林から切り出された木は粟野川や粕尾川から筏流し（サナガシともいいました）が行われました。「堰場」や「釜場」という地名は、そうした河川運搬の名残と考えられています。

もちろん河川は物資の輸送だけに利用されたわけではありません。飲料水や農業用水等様々なことに利用されていました。村人たちは河川に堰を設け田んぼに水を引き込み、また川魚を捕るために築やなを設けることもあったでしょう。

筏が川を下る際に、こうした堰や築場、川除普請（水害防止のための河川工事）の作業場を思いがけず壊してしまうことがありました。こうした危険に対処するため、貞享元年（一六八四）に、大芦川において、灌漑期である四月から七月までは筏流しを禁止するという取り決めがなされました。しかし林業が盛んになり川下げが増加するにつれ、灌漑期であっても、例外的に筏流しをすることが多くなります。こうしたことから半田村（北半田）では筏流しによる堰の損傷を修復する名目で、材木商人から堰の通行料「堰銭」を取ることが認められるよう

になりました。また、無断で堰を越える筏もあったため、堰越えの許可証である「川状」<sup>かわじょう</sup>が発行されるようになりました。さらに天保九年（一八三八）に半田村では、堰越えの順番待ちの間に筏をつなぎとめておく手数料として「繋銭」<sup>つなぎせん</sup>を取るようになりしました。河川の利用方法の違いから、材木商人と川沿いの村人たちの間ではしばしば紛争が起りましたが、話し合いを重ねながら合意を図っていったのでしよう。

粟野では明治時代以降も材木の取引は増加し、木材売買業者の団体「弘産社」<sup>こうさんしゃ</sup>が結成され、都会消費地に向けた地元木材の売り込み活動も行われたようです。筏流しによる川下げも続けられていましたが、鉄道等の新たな交通機関の発達により、明治二〇年代を境に徐々に消滅していきました。

《参考文献》

『栃木の水路』栃木県文化協会、一九七九年  
 竹末弘美 『下野の水路―鬼怒川水系をゆく』随想舎、二〇二一年

栃木県立博物館編 『平成二六年企画展・江戸とつながる川の道―近世下野の水運―』栃木県立博物館、二〇一四年



▲下野国の河川と江戸までの水運



▲現在の粟野川（釜場付近）

## 栗野の牧場

栃木県は現在、全国二位の牛乳生産量を誇っています。

牛乳が多く飲まれるようになったのは明治時代になってから  
のことで、それまでは、ごく限られた階級の人や病人が滋養の  
薬として服用する飲み物でした。牛乳の需要拡大に伴い、明治  
政府は殖産興業政策の一環として、畜産をはじめ西洋農業の導  
入を奨励しました。栃木県は山林や原野が広がり放牧にふさわ  
しい土地が多く、栗野にもいち早く畜産に目を向けた先覚者が  
現れました。

### ●発光路牧場

栃木県で初めて酪農経営に乗り出したのが安生順四郎（あんじょうじゅんしろう）  
36ページ）でした。日本人のタンパク質不足を補うのに牛乳が適  
していることや、菓子などの原料として牛乳の需要が増えてい  
くことを見込んだ順四郎は、明治九年（一八七六）、上粕尾村の  
発光路に「発光路牧場」を開きました。山林六五町（約六四・五  
ヘクタール）、資本金五八〇〇円、西洋種の牛二頭という規模  
でスタートし、国の所有地三八〇〇町を借り受けて事業を拡大  
しました。その後、松方デフレや栗野大火で自宅が全焼する等  
の苦難が続く、牧場は廃業寸前まで追い詰められましたが、牛  
を売り払い従業員に炭焼きをさせるなどして困難を乗り越えま

した。その後経営は回復し明治二八年（一八九五）の記録では、  
面積三八〇〇町歩、牧牛数は一三二頭まで達していたことが分  
かります。牧場は山の神から足尾境の粕尾峠、横根山に広がる  
広大な原野を所有し、栃木や宇都宮をはじめ県内九カ所に牛乳  
販売所を設置した他、植林や果樹の植え付けを行うなど多角的  
な経営を行いました。順四郎には、足尾銅山との交流を見据え、  
牧場付近に一つの村落をつくる構想まであったといえます。  
その後、明治三九年（一九〇六）牧場は保晃会に売り渡され、  
現在は当時の牧場の様子を思い浮かべることが難しいです。

### ●北半田の興農社

順四郎の他に畜産に着目したのが北半田の豪農・  
塩沢次郎右衛門と子・賢助でした。明治二年（一八八九）、塩  
沢父子を中心に酪農を営む株式会社組織として「興農社」が設立さ  
れました。牧場にするため約一二町歩の山林を開墾し、農業大  
学校を卒業していた賢助の尽力により西洋種の乳牛七頭を京都  
から購入しました。牧場は、宇治産の茶や桑、楮（紙の原料）、  
漆の苗を植える等、県が奨励した模範的事業を行いました。後、  
その後榆木の牛乳業者に引き継がれました。

### ●前日光牧場

昭和四八年（一九七三）には、横根山の山頂付近に「前日光

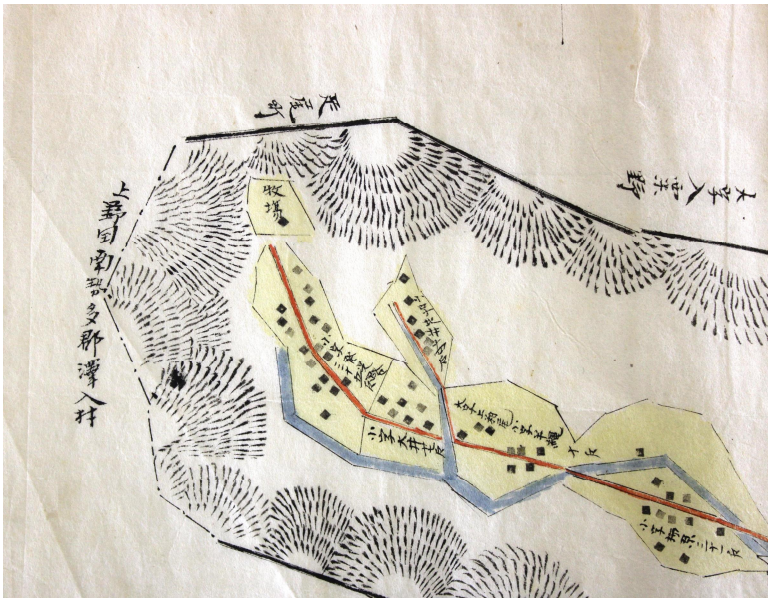
「牧場」がつくられました。栗野町と足尾町が約七〇ヘクタールの土地を整備したもので、現在は鹿沼市に経営が引き継がれています。

例年六月頃から、暑さ対策や足腰の強化のため肉用牛や乳用牛の放牧が行われます。標高一三〇〇mに広がる牧草地で伸び伸びと草を食べる牛たちの姿は、夏の風物詩になっています。



▲現在の前日光牧場

《参考文献》  
橋本智『とちぎ農作物はじまり物語』随想舎、二〇〇九年



▲明治25年(1892)の賀蘇尾村略図(「各郡町内道路地種目並住民家屋散綴之景状略図」栃木県立図書館蔵)発光路の奥に「牧場」と記されているのが分かる。

## コラム◎《老猿》の故郷は発光路

岩の上に座り右上方をじっと見つめる老いた猿。よく見ると左手には鷹の羽根が握られていて、今しがた格闘し飛び去った鳥の姿をその眼で追っているのかもしれない。高村光雲による木彫《老猿》は、そんなストーリー性まで感じられる大作です。木彫にはヒノキやサクラ、クス等様々な原料が用いられますが、皆さんは、国の重要文化財である《老猿》の素材が上粕尾・発光路産のトチの木であることは知っていますか。大正十一年（一九二二）に七〇歳の光雲がその半生を振り返った『光雲懐古談』という本に、彼が発光路でトチの木を得るまでの経緯を語った「柘の木で老猿を彫ったはなし」が載っています。

### ●《老猿》制作に至るまで

高村光雲（本名は光蔵）は、嘉永五年（一八五二）に江戸下谷（現在の台東区）に町人の子として生まれました。一二歳のとき高村東雲に弟子入りし仏師（仏像の彫刻師）としての道を歩み始めます。間もなく明治維新を迎えますが、この政治的大転換は仏師たちにも少なからぬ影響を与えました。江戸時代までは神仏習合により神道と仏教は混ざり合って信仰されていますが、神道を国教化し天皇中心の国家を確立するため、明治政府によって神仏分離政策が推し進められます。神仏分離がエ

スカレートし仏像や仏具の破壊や焼却に及ぶ「廃仏毀釈」も行われました（70ページ）。こうした中、仏像制作の需要は減少し仏師たちは困窮します。当時、象牙の「根付」が外国人の人気を博したため象牙彫りに転じる仏師も多くなりましたが、光雲は木彫をあきらめませんでした。西洋の印刷物や版画などで写実技法を学び写生を続けることにより新しい木彫を模索します。その後光雲は、明治十九年（一八八六）に発足した彫刻家の団体「東京彫工会」において木彫部の代表となり、翌年開校された「東京美術学校」（東京藝術大学の前身）では彫刻科の初代教授に就任、明治二十三年（一八九〇）には宮内庁に献納する「楠木正成像」の原型製作の主任となる等活躍の場を広げます。そうした折、明治二十六年（一八九三）五月に開催されるシカゴ万国博覧会へ出品する彫刻の制作依頼が舞い込んできました。この後は『懐古談』の記述を追っていきましょう。

### ●発光路でトチの木を得る

トチは、材質が真っ白で木目に銀光があって純色の木肌がとても美しい材です。以前よりトチの木で何か作ろうと考えていた光雲は、この機会にトチ材に見られる銀白の斑（まだら模様）を活かし年老いた猿を制作しようと思立ちます。トチの良材が柘木県内の「発光路」という場所にあることを突き止めた光雲は、知人で彫刻家の後藤貞行とともに現地向かうことにし

ました。寒さが残る三月、上野駅を出発した二人は宇都宮を経て鹿沼駅に降り立ちます。そこで光雲たちは人力車の車夫も嫌がるほどの山奥に発光路があることを知りますが、覚悟を決め徒歩で向かうことにします。谷間に雪が残る険しい山道を進み発光路に到着したのはその日の午後三時過ぎでした。

翌々日、光雲たちは「山猿同然」（光雲の表現です）の材木商に、断崖だんががいに生えるトチの木まで案内され、差渡し七尺さしわたし（直径約二m）程の大木を三円で買い取ることに決めます。木挽代と運搬費の一部を支払い五月までには「浅草の花川戸の河岸はなかわど」まで着けることを約束して、東京への帰途につきました。しかし、山中からの大木の運び出しは困難を極め、八月半ばを過ぎてようやく花川戸に到着しました。作品の制作費用として四〇〇円の政府補助はあったものの半分の二〇〇円以上が材木の購入と運搬代に消えてしまったということです。さらに九月に長女・咲子さくこが一六歳で病死する不幸が光雲を襲いますが、気を取り直して彫刻の制作に没頭します。

トチの木を彫り進める光雲の脳裏のうりに、発光路で出会った山猿のような材木商人の姿が浮かんだかどうかは分かりませんが、発光路のトチの木が赤黒く茶褐色ちやかっしよくであったことから、当初目論んでいた白猿ではなく「野育ちの老猿」を彫ることにしたのは確かなようです。








《参考文献》

高村光雲『幕末維新懐古談』岩波文庫、一九九五年

▲ 《老猿》高村光雲作（Colbaseより転載）  
東京国立博物館蔵。高 90.9 cm。明治 26 年  
(1893)。

・麻ができるまで

月	作業内容	
11月	冬ばり	
12月	栽培	
1月		
2月	堆肥づくり	
3月	地ごしらえ	
4月	お天祭 中耕・麻かき	
5月	嵐除け	
6月	アサスグリ 麻起こし	
7月	麻抜き・麻切り B 生麻まるき	収穫
8月	湯かけ C 麻干し	
9月	精麻 床まわし・床臥せ 麻はぎ D 麻引き E 精麻干し	
10月	麻引き上げ	

